

山川出版社『中学歴史 日本と世界』を用いたアクティブ・ラーニングを織り交ぜた授業実践

佐藤 慎也

高等学校では、今年度から新科目の歴史総合が開始された。高等学校学習指導要領第3節歴史総合(2)目標(1)には「知識及び技能」に関わるねらいが示されているが、解説には「小学校や中学校の社会科での学習を踏まえ、生徒が身に付けた技能を繰り返し活用して習熟を図るように指導することが大切である」という記述がみられる。

筆者は学習指導要領解説に書かれているように、高大接続のみならず、中学校社会科歴史的分野と高等学校の歴史科での学びとの接続も同様に重要であると考えているが、高等学校に勤める教員が中学校の授業を見学する機会はあまり多くないと思う。本稿では、中高一貫教育校(中学1学年対象)における山川出版社の中学校教科書『中学歴史 日本と世界』(以下、教科書)を用いた、アクティブ・ラーニングを織り交ぜた授業実践を紹介していく。

中学校社会科歴史的分野の特徴

小学校の歴史学習は、通史として網羅的に取り扱うものではなく、我が国が歩んできた大まかな歴史を理解させたり、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、我が国の歴史上のおもな事象をとらえ、我が国の歴史の展開を考えるとともに、歴史を学ぶ意味を考え表現したりすることを重視している。

これに対して、中学校の歴史的分野の学習では、以下のような学習が求められている。

(1) 歴史を考察し説明する学習

歴史学習は、個別事象の時系列的な関係性を詳

細に理解し記憶することにとどまることが多いが、「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を、歴史を考察して説明する「視点や方法(考え方)」として生徒に獲得させる必要がある。時系列(時期・年代)だけでなく、諸事象の推移(展開・変化・継続)、諸事象の比較(類似・差異・特色)、事象相互のつながり(背景・原因・結果・影響)という視点を意識して、歴史を考察し説明できるようにすることが重要である。

(2) 課題解決的な学習

歴史の考察・説明は、課題解決的な学習と結びつけることで、課題について考察し表現することができる。課題(問い)は、思考力・判断力・表現力等を身に付ける学習をふまえて、各時代において焦点化した知識を身に付けるように設定する必要がある。

(3) 過去から現在までの各時代を大観する学習

各時代のまとめとして、時代の特色を大きくとらえ、政治の展開、産業の発達、社会の様子、文化の特色などほかの時代との共通点や相違点を比較したりしながら、各時代をつないで、歴史の大きな流れを大観できるようにする必要がある。この学習では、いわゆるアクティブ・ラーニングを織り交ぜた授業を意識する必要がある。

(4) 過去と現在との関係を強調する学習

学習指導要領の改訂によって、中学校社会科の歴史的分野では世界史学習がやや増加した。また、主権者を育成する観点から、民主政治の来歴や現代につながる政治制度の成立や人権思想の広がりについて学習させる必要がある。さらに、過去か

ら現在に受け継がれてきた様々な伝統・文化の学習の充実がはかられている。

単元指導計画の作成(「問い」の設定)

先述の(1)～(4)の学習を実現するためには、「年間指導計画→単元指導計画→本時の展開」といった具合に、指導計画を練る必要がある。筆者の場合は、年度初めに授業のコマ数をすべてエクセルで整理して算出したうえで、「単元を貫く問い」を設定する。「単元を貫く問い」とは、単元全体を学習していくなかで考察する問いのことであり、主として先述の(1)(3)を問うものである。単元の区切り方は、基本的に学習指導要領に準じた形で設定しているが、単元全体の授業時数が大きくなりすぎると、かえって生徒にとってとらえにくくなることもあるため気をつけている。なお、本実践では表1のように単元指導計画を作成した。「問い」は、教科書に記載している「問い(課題)」や「ステップアップ(応用的な問い)」に記載されているものをベースに、一部アレンジを加えることで設定した(表1中の下線が教科書に掲載されている「問い」や「ステップアップ」)。教科書に掲載の

	学習内容(問い)
第1・2時	単元を貫く問いに対する仮説を立てる 荘園の成立と武士の登場(どのように荘園が全国的に広まっていったのだろうか)
第3・4時	院政と武士の成長(「平氏にあらずんば人にあらず」というまで力をもつことができた要因は何だろうか)
第5時	鎌倉幕府の成立と執権政治(承久の乱によって鎌倉幕府と朝廷との関係はどのように変化したのだろうか)
第6時	武士の日常・民衆の生活(鎌倉時代の人々はどうような暮らしをしていたのだろうか)
第7時	鎌倉時代の文化(鎌倉時代に生まれた仏教の教えはどのように生まれ、どのように広がったのだろうか)
第8・9時	モンゴルの襲来と鎌倉幕府への失望(鎌倉幕府に対する不満が高まったのはなぜだろうか)
第10時	中世社会の成立－まとめ－(中世の多様な権威や権力の中で、なぜ武士が台頭することができたのだろうか(「単元を貫く問い」を兼ねる))

表1 単元名「中世社会の成立」の単元指導計画

「問い」は歴史学習において本質をついたものであるため、積極的に活用するとよいだろう①。

実践①——第5時：鎌倉幕府の成立と執権政治

【導入(5分)】 実践①では、先述の(1)(2)の要素を取り入れた、日頃の知識習得型の授業を扱う。導入では単元全体を振り返り、本時は承久の乱を契機とする鎌倉幕府と朝廷との関係の変化について扱うことを伝えた。またループリックを提示し、本時の学習に対する見通しをもたせた(図1)。

今日の問い「承久の乱によって鎌倉幕府と朝廷との関係はどのように変化したのだろうか」		
SS(大変良い)	S(良い)	A(もう一歩)
承久の乱に伴う鎌倉幕府と朝廷との関係の変化について、執権、後鳥羽上皇、六波羅探題の3つのキーワードを用いながら、100字程度で適切に説明している。	承久の乱に伴う鎌倉幕府と朝廷との関係の変化について、執権、後鳥羽上皇、六波羅探題のうち2つのキーワードを用いながら、100字程度で説明している。	承久の乱に伴う鎌倉幕府と朝廷との関係の変化について、執権、後鳥羽上皇、六波羅探題のうち1つのキーワードを用いながら、100字程度で説明している。

図1 実践①のループリック

【展開①(15分)】 鎌倉幕府の成立から武士の主従関係と幕府の政治機関に関する講義をした。この際に教科書p.70に掲載の鎌倉のイメージ図を用いて、「なぜ源頼朝は鎌倉を選んだのか」と発問しワークシートに記入させた。さらに、御恩と奉公の模式図を用いて「東国武士は幕府に何を期待したのか」と発問し考察させて、当時の主従関係の特徴をつかませた。

【展開②(25分)】 生徒は承久の乱について、北条政子の呼びかけに東国武士が応じたことで、幕府が勝利をおさめたことを知ってはいるが、上皇側についた武士も多かったことは知らない者が多い。このため、まず生徒に当時の武士になりきらせて、北条氏につくか、後鳥羽上皇につくか、ペアワークをさせた。数名の生徒の意見を全体で共有したが、生徒の意見は7:3で幕府側に立つ生徒が多かった。そこで実際には東国武士の多くは幕府側

についた一方、上皇側についた武士も多くいたことに言及した。そして、承久の乱後に西国に地頭が多く設置されたことを地図で示し、教科書p.72 ③「伯耆国東郷莊下地中分図」を読み取らせ、「なぜ彼らは地頭になったのか、また地頭になると何がよいのか」「この下地中分図から何がわかるか」と発問することで、課題解決的な学習と結びつけた。生徒のなかには、「東国武士のなかには地頭となることを目的に幕府側について戦ったのではないか」と意見する者もいた。その後、朝廷の力を圧倒した幕府は、六波羅探題を設置し執権政治をおこなったことを説明した。

【まとめ(5分)】 ルーブリックにもとづき、振り返りシートに問いについて100字程度でまとめさせた。時間内で終わらない生徒は宿題としている。8割程度の生徒は、ルーブリックのSSレベルでよく記述することができていた④。

実践②——第10時：中世社会の成立(まとめ)

【導入(5分)】 実践②では、先述の(1)～(3)の要素を包括した、アクティブ・ラーニングを織り交ぜた授業を扱う。導入では、単元全体をダイジェスト的に振り返らせ、本時の問い(単元を貫く問いと兼ねる)とルーブリックを図2のように示した。なお、この問いに対する仮説は、単元の第1時で取り組ませている。こうすることで、単元を学習する前後での生徒の学習状況の変容をみる

今日の問い「中世の多様な権威や権力の中で、なぜ武士が台頭することができたのだろうか」

SS(大変良い)	S(良い)	A(もう一息)
中世社会において武士が台頭した理由(原因・背景)について、中央と地方の政治、産業、社会と文化、外国関係の4つのうち複数の視点をふまえつつ、考えた結果を根拠や論理をもって筋道立てながら100字程度で自分の考えを説明している。	中世社会において武士が台頭した理由(原因・背景)について、中央と地方の政治、産業、社会と文化、外国関係の4つのうち複数の視点をふまえて、100字程度で自分の考えを説明している。	中世社会において武士が台頭した理由(原因・背景)について、中央と地方の政治、産業、社会と文化、外国関係の4つのうち1つの視点をふまえて、100字程度で自分の考えを説明している。

図2 実践②のルーブリック

ことができる。

【展開①(10分)】 ワークシート(図3)のⅢに教科書や資料集、今まで学習した内容の振り返りシート、授業プリント等を活用させ、「武士が台頭することのできた理由」に関するキーワードを簡条書きで書かせた(ブレインストーミング)。この際に、考える視点として「中央と地方の政治」「産業」「社会と文化」「外国関係」を示すことで、多面的・多角的に考察できるように工夫した。

【展開②(15分)】 4人1組の10グループを作成し、リーダーと書記を設定した。各グループには、ワークシートのⅣに掲載のクラゲチャートをA3判に拡大した、グループワーク用プリントを配布し、クラゲチャートの書き方を説明したうえで、グループとしてのオリジナルの意見をまとめるよう指導した。なおクラゲチャートとは、事象の理由や背景を説明するときに活用する思考ツールの1つである。

【展開③(10分)】 ディスカッション大会として、4人グループのうちの2人をほかのグループに移動させ、たがいの意見を議論させた。この際に、「建設的な議論をする」「反論≠否定」「反論されたら感謝の気持ちをもつ」の3つを注意点として説明した。この活動で生徒に自分たちのグループにはない視点を発見させ、より意見を深めさせることができた。

【まとめ(10分)】 グループで作成したクラゲチャートの修正の時間を与えた。そして、3つのグループの代表者にグループで考察した内容を説明させて、クラス全体での共有をはかった。グループワーク用プリントは回収して、宿題として振り返りシートに本時の問いに対する生徒個人の考えと、単元全体を通して生まれた気づき等を書いて提出するよう伝えた。

生徒が取り組んだグループ用ワークシートは、比較的よく取り組めていた(図4)。また振り返りシートの本時の問いに対する生徒の考えの記述に

中学校・社会(歴史) 授業プリント

第3章 1節「中世社会の成立」2節「武家社会の成長」 組 番 氏名 教p64～63、頁p47～62

中世社会の成立

＜学習のポイント＞
中世の多様な権威や権力の中で、なぜ武士が台頭することができたのだろうか

Ⅰ. 今日の授業の流れ(時間は目安)

1. 導入	5分	2. 個人ワーク	8分
3. グループワーク	15分	4. ディスカッション大会	15分
5. まとめ	7分		

Ⅱ. 今回取り組むこと

これまでの学習(NO24～29)で、天皇・上皇や貴族、農民などといった様々な立場の人々がいる中で、最終的に武士が台頭していくまでの大きな流れを学習してきました。今回は「中世の多様な権威や権力の中で、なぜ武士が台頭することができたのだろうか」をテーマに、「豪族同士の関係性(因果関係)」をしっかりと理解したうえで、グループで「解説」しましょう。

Ⅲ. 【個人ワーク】「武士が台頭することができた理由」って何だろうか？

教科書や資料集、振り回りシート、授業プリント・ワークシート NO24～29 を活用して、「武士が台頭することのできた理由」をできるだけ多く、簡潔書き書いてみよう(「貴」よりも「覇」!)。

※ 視点：中央と地方の政治、産業、社会と文化(宗教含む)、外国関係

Ⅳ. 【グループワーク】ディスカッション大会に向けて準備しよう

グループとしての意見をクラゲチャートにまとめ、ディスカッション大会に向けた準備をします。ディスカッションは他のグループを行い、活発に意見交換をしてもらいます。他のグループに負けないように、自分たちオリジナルの意見を考えよう。

クラゲチャートとは
理由を説明するとき便利なツールのひとつがクラゲチャートです。例えば、「大野先生がかっこいい」と感じた場合、このように感じた理由は人それぞれ異なるはずですが「熱い」「声が大きい」「おもしろい」など…。多くの人が「大野先生がかっこいい」と感じた理由をまとめると、「大野先生のかっこよさ」の「秘密」を客観的に、分かりやすく整理することができます。

中学校・社会(歴史) 授業プリント

組 番 氏名 NO.30

★ 自分たちのグループの「クラゲチャート」を以下にメモしよう。

武士が台頭することができた

Ⅴ. 【ディスカッション大会】他のグループの意見を以下にメモしよう

【グループ】	SS(大変いい)	S(いい)	A(もう一歩)
中世社会において武士が台頭した理由(原因・背景)について、中央と地方の政治、産業、社会と文化、外国関係の4つのうち3つの理由の理由を挙げて、100字程度で自分の考えを説明している。	中世社会において武士が台頭した理由(原因・背景)について、中央と地方の政治、産業、社会と文化、外国関係の4つのうち3つの理由の理由を挙げて、100字程度で自分の考えを説明している。	中世社会において武士が台頭した理由(原因・背景)について、中央と地方の政治、産業、社会と文化、外国関係の4つのうち3つの理由の理由を挙げて、100字程度で自分の考えを説明している。	中世社会において武士が台頭した理由(原因・背景)について、中央と地方の政治、産業、社会と文化、外国関係の4つのうち3つの理由の理由を挙げて、100字程度で自分の考えを説明している。

図3 ワークシート

はつぎのようなものがみられた。

新しい荘園が登場して、それを地頭請や下地中分を用いることで武士が土地支配をしたから。中央では、鎌倉幕府と御家人との間に御恩と奉公の主従関係を作ったから。そして、武士の素朴で力強い気風が特徴の鎌倉文化も生まれ、武士が台頭するようになった。

武士が台頭できた理由として、様々な戦乱、摂関政治の崩壊、徴税、日宋貿易などが関係すると思う。中世の戦乱は武士がいないと治められず、摂関政治の崩壊で武士の武力が上がり、徴税や日宋貿易を行うことで多くの富をたくわえていったから台頭したと思う。

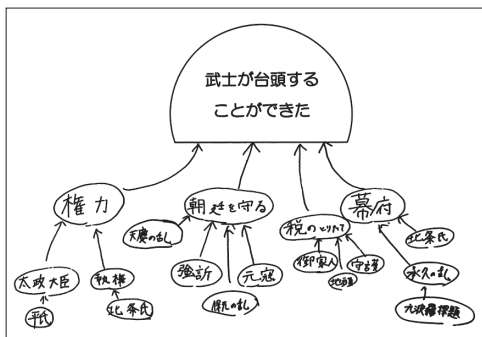


図4 生徒が作成したクラゲチャート

おわりに

歴史総合は近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とそのなかにおける日本を広く相互的な視野からとらえ、資料を活用しながら歴史の学び方を習得し、現代的な諸課題の形成について考察・構想する科目であるが、教員側が意識しないと中学校と同じような内容になりかねないと考えている。このため、今後は筆者も含めて中学校歴史的分野に対する理解をより深めたうえで、高校段階での歴史総合や歴史探究のあり方について検討していく必要があるだろう。

- ①「問い」の設定の仕方については、及川俊浩・杉山比呂之編『アクティブ・ラーニング実践集 世界史』(山川出版社、2019年)の「コラム⑥「深い学び」を実現するための問い」を参照してほしい。
- ②振り回りシートについては、及川俊浩編『アクティブ・ラーニング実践集 近代・現代』(山川出版社、2021年)の「実践2」を参照してほしい。

(さとう・しんや／東京都立大泉高等学校・附属中学校教諭)